
「復讐」

ダムとチェリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「復讐」

【著者名】

ダムとチヨリー

ZZード

ZZ9782Z

【あらすじ】

あいつに復讐するんだ。
小学校でいじめてきた
あいつに復讐するんだ。

そんな「ボク」の
復讐生活。

「復讐」第1話

僕の今までの12年間の人生は、悲惨なものだつた…

いつからだろう。

学校に行きたくなくなつたのは…

小学校1～4年生。

あの頃のボクは

毎日が楽しかつた。

放課後は必ず仲の良い

友達と遊んでいた。

ボクの顔には

笑顔が絶えず、

友達もまた同様だつた。

だが、そんな生活は

ある日を期にして

一瞬で途絶えたのだ…。

小学校5年生。

クラス替えだつた。

当時、ボクの小学校では

有名だつたいじめっ子と

一緒のクラスになつたのだつた。

ボクは全く気にしなかつた。

なぜなら、僕はみんなに

信頼されていたから。

勝手な考え方

だつたのかもしない。

だけど、

自分でそう思えるほど

現実にボクは信頼されていた。

だけど……

だけどそれがいけなかつた。

みんなに好かれていた

ボクはいじめっ子

に目をつけられた。

最初の方は耐えられない

いじめではなかつた。

友達がいたから。
親友がいたから。
仲間がいたから。

だけど、いつしか
ボクの周りには
友達と呼べる存在は
無くなつていた

「何でだろ?」

そう考え続けた
1年が終わり

ボクは小学6年生になつた。いじめもエスカレートした。ボクはついに決心した。

先生に伝えることを。

だけど、ボクの思つた通りの答えが返ってきたわけではなかつた。

あの先生は言つた。

「いじめられる君にも原因があるんじゃないのか?」と

その時分かつた。

先生は知つていたんだ。

ボクが……

いじめられることを

この先生は……

分かつたうえで、あの最低な奴に味方していくんだけど。

ここにと同じ空気を
吸っているんだと思うと

吐き気がした。
めまいがした。

こんな先生がいるから
いじめが無くならないんだ。
心底思つた。

数日後。

やはりいじめられた。
過去に友達だった奴に
何度も何度も訴えた。

「どうして」と。

理由は一つだった。

あのいじめっ子のせいなんだ。あいつが脅してみんなを操ってるんだ。

全部あいつのせいだ。

ボクの人生から、
「笑顔」が消えたこと。

「友達」が消えたこと。

その時ボクは思つた。
復讐してやると。
あの最低な奴に。

そして時は過ぎ
卒業式が近づいてきた。
そんな時、あいつが
当時難関といわれていた
乙中学校に行くんだと
自慢していることを
耳にした。

そういう勉強だけではなく
もっと大切な勉強も
したらどうだと
あの馬鹿に言って
やりたかった。

それを聞いた時からだ。
ボクは毎日勉強した。

その努力が実り、
見事乙中学校に合格。

何としてもあいつと
同じ中学校に行く
必要があった。

復讐するためには。

ボクの人生に
「友達」を。
「笑顔」を。

取り戻すために。

そして中学校生活。

ボクの復讐が始まる。

「復讐」第2話

中学校の入学式。
真っ先に見たものは
クラス表だった。

1～6組まであった。
ボクは2組。

「あいつ」は
何組なのかと
クラス表の前で
立ち止まっていた。

見つけた。

3組だ。

同じクラスでは
無かつたのが

嬉しかったのか
悔しかったのか

ボクには分からぬ
感情に襲われた。

入学してからしばらくは
いじめの無い

平和な日が続いた。

だけど、

誰とも関わろうとも
しないボクは
みんなの中には
存在しない人間に
なっていた。

だけど…

あの小学校生活を
乗り越えてきた
ボクにとつては、
十分すぎるほど
平和な日々だった。

こんな日々が
いつまでも
続けば良いのに…

そう思つて
過ごしていた。

だけど、ボクは知った。

あいつに対して
あいつがまた、
いじめていることを

何も罪のない人を

ただ、気にくわない

それだけで
いじめていることを。

胸の奥に

沸き上がる怒りを
抑えられなかつた。

いつか必ず
復讐してやる。

この気持ちは、

以前とは比べものに
ならないくらい
大きなものになつた。

そして、いつしか
この気持ちが、
ボクの生きがいに
なつていた。

ある日、
あのいじめられていた
人に話しかけてみた。

やつと…

ボクを分かつてくれる
人に出会える。

きつと…

ボクを分かつてくれる。

そんな気持ちを持つて、
彼に近づいた。

いつ以来だらり…

学校で、話すのなんて

いつ以来だらり…

こんな言葉を

口にするなんて

ボクは勇気を

出して彼に言った。

「友達にならう」

「復讐」第3話

彼はボクに言つた。

「本当に……」

「僕に言つてるの?..?」

彼の気持ちは

痛いほどよく分かった。

ボクは言つた。

「もちろんだよ」と。

そう言つと、

彼の目に涙が

見えた気がした。

ボクの目にも涙が流れた。

泣くつてこんなこと
なんだなって

改めて思つた。

ボクたちはお互いに
泣きあつた。

今まで胸に抱えていた

全てが、涙と共に
流れていった。

けど、あいつに対する
思いはどうしても

消えなかつた。

休み時間の終わりの
チャイムが鳴り、

ボクは放課後
会う約束をして
教室へ向かつた。

そして意味もない
学校生活の1日が
終わり、放課後。

ボクは彼にこう言った。

「ボクも、君と同じく
いじめられていたんだ」

彼は驚くような
目でボクを見つめた。

少し間が空いてから
ボクは彼に伝えた。

いつか、必ず

あいつに復讐してやる

いつか、君の分まで

あいつに復讐してやる

必ず……

復讐してやると。

彼は少し戸惑った
顔をしながら、

ボクにこう言つた。

「僕も……その復讐
手伝つていいかな？」

正直、断りたかった。
唯一の友達を、
危険に晒すわけには
いかないと思った。

だけど、さつきの
戸惑つた顔とは一変し、
彼の顔は決意に
満ちあふれていた。

「もちろん良いよ」
ボクは彼に言い、

あいつへの復讐を
お互に近い合った。

こうして、「ボク」の
復讐は終わり、

「ボクたち」の
復讐が始まった。

次の日の放課後。

ボクたちは
話し合つた。

どうやつて

あいつに復讐するか。

彼はかなり
頭が良いらしく、

到底ボクには
思いつかない案が
たくさん出て來た。

大まかな計画は
全て彼に任せて、

ボクは少しずつ
工夫を加えていく。

いつの間にか

ボクたちの
計画のスタイルは
このように

確立されていた。

それから何日かけて
話し合った結果、

ついに計画は完成した。

やつてやるや。

絶対にあいつに
復讐するんだ

お互い誓った約束を
胸に刻み、

計画の日である
卒業式を待ち続けた。

時は流れ、卒業式前日。
ついに明日復讐の日が
来るとと思うと、
眠れなかつた。

そうして眠れないま
夜が明け、
早々と朝食を済ませ、

「復讐」の準備のため

いち早く
学校へ向かつた。

準備といつても
大したことはしない。

ボクの学校には
東、西、南、北と
4つの玄関がある。

一番人通りの少ない
南玄関のガラスを割り
行き慣れた学校へ
足を踏み入れた。

ほぼ毎日通っている
この学校が、何か
違う建物に思えた。

真っ先に「あいつ」が
いつつもいる
教室へ向かった。

お前のせいだ…

あいつの机を
蹴り飛ばしたかった。

そんなことしている
場合じゃない。

自分に言い聞かせて

体育館へ向かつた。

彼はもう準備を
終えていた。

全ての準備が終わり、
学校の外に出て
卒業式を待つ。

「いよいよ…だね」
彼がボクに言った。

「ああ」ボクは答えた。

しばらく無言が続くと
ついに学校の門が
正式に開いた。

「じゃ、行くか

拳を合わせた後、
お互の教室に向かっていった。

「復讐」最終話

いよいよ卒業式。

長つたらしい

卒業証書授与が終わり、
次は卒業生徒による
合唱である。

指揮・伴奏が位置に着き、伴奏が最初の

1音を弾いた瞬間

「今だ！！」

スイッチを押した瞬間
準備した通り体育館の
電気は消え力ーテンは
閉まり体育館は
暗闇に包まれた。

こんな仕掛けを
作れるなんて彼は
どれほどすごいんだ
本気でそう思った。

予想外の事に体育館中が
ざわついていた。

ボクは体育館ステージに向かい、立った。

ステージの光が
ボクを照らした。

ざわつきは収まり

全校生徒の目が
ボクに向けられた。

「お前のせい……
お前のせい……
ボクたちの人生は
めちゃくちゃになつたんだ……！」

自分でも分からない
くらい大きな声が
出た気がした。

「お前さえ……
お前さえいなかつたら
良かつたんだ
お前なんか……
消えちまえ——……」

そう言つた瞬間だった。

先生2人に
取り押さえられた。

必死に拘束を
振りほどこうとした。

だけど無理だつた。

大人2人の力に
太刀打ち出来る訳が
無かつたのだ。

無理矢理体育館の外へ
連れていかれながらも

ボクは叫んだ。

「お前なんか」

死んでしまえーーー！」

その声が体育館中に
響くと同時に
ボクは意識を失つた。

その後は

何があつたか
全く覚えてない。

気がついたら
家にいた。

何か、虚しい…

不完全燃焼、
とでも言つておこうか。

しばらくボーッと
していると唯一の
友達が家に来た。

「大丈夫！？」

チャイムも鳴らさず
大声で近寄る彼。

礼儀のかけらも無いと
言つてやりたかったが

空気を呼んで

「ああ。大丈夫さ」

と答えた。

「ん？」

よく見ると彼の顔に
大きなアザが見えた。

「これ……どうしたの？」

恐る恐る聞いた。

「え……？」

ああ、何でも無いよ
ちょっと転んじゃって

嘘だ。

すぐに嘘だと分かった。

「あいつに……
やられたのかー？」

聞いてみた。

感情が高ぶった。

「うん……

『今日の卒業式の

件における前は関係してゐる』

つていきなつ……』

予想通りだ。
いつそあいつを
殺してしまおうかと
思つてしまふほどの
怒りに襲われた。

「あいづまびこじだ

「え?』

「あいづまびこじだと
聞いているんだ!』

「た、多分まだ
学校だと……』

学校と聞いた瞬間
走り出していた。

学校に着くと、
やはりあいづはいた。

また、気の弱そうな
やつをいじめていた。

「てめえ

まだそんなくだらない
ことやつてんのかあ！」

あいつの元に

全速力で向かった。

そこからは
何も覚えていない。
気がついたら
あいつを含め
20人ほどの人間が
倒れていた。

「俺が……やつたのか？」

まあ良いや。

これで、

ボクたちの復讐が
終わると思うなよ

今日も、
ボクたちは復讐する。

人生を変えるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9782z/>

「復讐」

2012年1月1日21時47分発行